

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月31日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520011

研究課題名（和文）

西洋近代観念説の自然主義的論理とその解体過程についての研究

研究課題名（英文）

Studies of the Naturalistic Logic in the Early Modern Western Theory of Ideas and Its Dissolution Process

研究代表者

富田 恭彦（TOMIDA YASUHIKO）

京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授

研究者番号：30155569

研究成果の概要（和文）：近代の西洋では、日常慣れ親しんだ知覚可能な世界のほかに、理論上想定される別の世界（例えば原子と空虚からなる）を本当の世界として想定するという一種の二重存在説が顕著となった。そして、慣れ親しんだ知覚世界は、想定された真の世界からわれわれの感覚器官に刺激が与えられた結果としてわれわれが心の中で知覚するもの、つまり「心の内なる観念」からなるものとして位置づけられることとなった。こうした「観念説」は、明らかに科学のある考え方に基づくものであり、その意味で本来「自然主義的」である。本研究は、この観念説の自然主義的論理がバークリやカントらによってどのように歪められ解体されていったかを、明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In the early-modern West a sort of ‘two-fold’ existence view—the view that in addition to the perceptible, familiar world we should theoretically postulate a true world (comprised, for example, of atoms and the void)—explicitly appeared, and the former, familiar and perceptible world was treated as one that consisted of the items that we perceive as so many results of the true world’s affecting our sensory organs, namely, ‘ideas in the mind’. In this sense the early modern ‘theory of ideas’ was clearly based on a scientific view; in other words, it was originally ‘naturalistic’. In the present studies I clarified how Berkeley, Kant, and so on distorted and dissolved the naturalistic logic of the theory of ideas.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：観念、観念説、粒子仮説、自然主義、ロック、バークリ、ヒューム、カント

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、かねてより多年にわたって科学研究費補助金等を得ながら、本研究の準備を進めてきた。ロックの自然主義的認識論をいかに肯定的に読むべきかについての研

究代表者の基本的視点は、『ロック哲学の隠された論理』（1991年）およびその英語版 *Idea and Thing (Analecta Husserliana 46, 1995, pp. 3–143)* において提示され、後者はすぐにイギリスの専門誌 *Locke Newsletter* および *British*

*Journal for the History of Philosophy* において高い評価を得た。自然主義を近代観念説の基本論理とすれば、これを否定的に見たパークリやカントは、自説において何らかの仕方での基本論理を歪めたことになる。研究代表者はこの自然主義的論理空間の変質過程を確認すべく研究を進め、その成果を *Locke Studies* 等々において公にしてきた。2004年にオックスフォード大学で開かれた John Locke Tercentenary Conference に研究代表者が唯一の日本人研究者として講演すべく招かれたことは、研究代表者のロック研究の方向性に対する欧米の研究者の関心の高さを示している。また、2007年にドイツで相次いで出版された2冊の論文集のうちの1冊、*The Last Paradigm of Locke's Theory of Ideas: Essays and Discussions with John W. Yolton* (Hildesheim, Zürich, and New York: Georg Olms, 2007) に対して、極めて好意的な書評が2008年に *British Journal for the History of Philosophy* に掲載されたことも、研究代表者が準備してきた観念の論理の解体過程への独自の視点が国際的に高く評価されていることの証であった。

## 2. 研究の目的

ロックの観念説的認識論は、観念を「心の直接的対象」とするところから、久しく不可知論ないし懐疑論の典型とみなされてきた。しかし、その観念説の枠組みの形成過程をたどってみると、そうした伝統的解釈が西洋17世紀観念説の論理を十全に捉えていないことが明らかになる。物そのもの／観念／心という三項関係からなるその枠組みにおいては、日常的な「物」に代えて新たな「物そのもの」が指定されることにより（粒子仮説的自然学）、物／心という二項関係的な日常的認識観の枠組みにおける日常的な「物」が、心の内なる「観念」へとその地位を変えている。したがって、日常的な「物」の直接的認知と、自然学による新たな物そのものの指定こそが、観念説の基盤をなしていたと見られる。

観念説的認識論が、そもそも古代の原子論に由来する粒子仮説的自然学を基盤とするものであったということは、それ自体としては、必ずしも目新しい知見ではない。例えば、そのためにカントは、経験科学に基づくことのない認識論を展開しようとしたと考えられてきたからである。しかし、「観念」とか「表象」とか言われるものが、そもそも自然学の論理空間の中でそれ自身の位置を与えられていたということからすれば、「観念」や「表象」を維持しながら自然学的要素を切り捨てようとする認識論的試みは、いわば自らの足下を掘り崩す営みであったと言わざるをえない。つまり、パークリやカントの認識論的営みは、ロック的認識論の欠陥を除去

しようとするものであったとされるが、それは、上記の視点からすれば、観念ないし表象の自然学的論理空間に依拠しつつ、同時にそれを解体しようとするものであったことになる。ロックの観念説の自然主義的論理を再確認した上で、この観念の論理空間の解体過程を、パークリ（とヒューム）の場合を取り上げて明らかにすること、そして、その成果をもとに、カントの認識論的枠組みを理解するための基本的視座を手に入れること、そしてさらには、そうした視点からして、西洋近代の「認識論的転回」がどのような論理の変容によって推進されていたと見られるかを明らかにすることが、本研究の主要目的である。

## 3. 研究の方法

(1) 2009年度前期は、ロックの「知覚表象説」的契機（三項関係的認識論の枠組み）と「直接実在論」的契機（日常的・二項関係的観点）との関係を再検討することによって、観念本来の自然主義的論理空間の重層構造を再確認することから始める。日常的に「物」と見なされているもの（これを「経験的对象」と呼ぶ）の向こう側に新たな粒子仮説的な「物そのもの」を指定することによって、経験的对象は、心の内なる「観念」として、他のすでに「内的」とされてきたものとともに「心の中」に位置づけ直され、それによって物そのもの／観念／心からなる三項関係的枠組みが構成される。この基本的な見方をより明確にするには、日常的にすでに「内的」とされているもの、例えば痛み感覚や狭義の心像と、経験的对象が身分を変えて観念とみなされるようになったものとの関係を、明確に示す必要がある。プラハの Charles 大学 James Hill 教授の要請に応じて、本研究ではこの点をまず明らかにしよう試みる。その場合、ロックに先行して17世紀観念説の原型を与えたデカルトの見解をも念頭に置き、17世紀の自然主義的観念説の原型が持つ論理を、可能な限り明晰に再提示するよう努める。

2009年度後期は、以後の研究の進展を着実なものにするため、上の作業をさらに進めるとともに、研究代表者の見解を理解する上で一般の研究者にとってしばしば躓きの石となっているもの——すなわち、日常的な「物」を構成する要素的観念のうちからあるものを選んでそれらから新たな粒子仮説的「物そのもの」の「観念」を作るという研究代表者の言い回しが、物そのものと観念とを峻別するロックの基本的立場とどう整合するかという問題——について、その答えを明晰に示す方途を探る。ロックが「観念」を広狭二義に用い、「物そのもの」ですら「観念」とする場合があることをどのように捉えるかという、これまで指摘されながらも十分に検討

されてこなかった問題が、ここではとりわけ重要となる。パークリの観念論とは異なる意味ですでにある種の観念論的な性格を示していたこのロックの立場を十全に理解するには、いわゆる「志向性」という、その論理を十全に把握することの極めて困難な現象に、立ち向かわなければならないと予想される。だが、いずれにしても、こうした作業を進めることによって、本研究の以後のプロセスをより容易に遂行することが可能になるとともに、研究代表者のロック解釈がより広範に理解されるものとなり、研究代表者の見解がほとんど海外でのみ注目されているという事態を改善することに繋がるはずである。

(2) 2010年度前期は、パークリの自然科学に関する考え方について、再検討を行う。パークリは、ロック的な「物そのもの」を否定しながら、「直接的知覚」の対象となるものとしての「物」、つまりロック的な「経験的对象」に関しては、その在り方と諸観念の生起との関係を、「自然法則」として捉える視点を有する。もとより、パークリにとっても、ロック同様、「経験的对象」は観念の集合体にほかならず、したがってパークリがここで言う「自然法則」は、観念間に認められる記号的規則性にほかならない。ヒュームを想起させるこうした自然法則の捉え方を解明し、それをロックの場合と比較することによって、パークリの観念説の論理のなご一層の明確化を図ることが、ここでの課題となる。

2010年度後期は、パークリが物質に代えて持ち出す「神」が、どのような論理空間を持っているかを明らかにする。ロックの観念説でも、神は重要な役割を果たすが、パークリは、物質ないし物そのものを拒否することと引き替えに、神に対してより重大な役割を担わせる。パークリにおけるこの神の役割に十分な検討を加え、物質否定によって空白となった論理空間が、その神への役割付与によって十全に満たされたと言えるかどうかについて、ここでは考察する。彼が行う神の存在証明、および、それと他者存在の記号論的証明との関わりについても、ここで併せて検討する。2010年度のこうした一連の作業によって、かつてIan Tipton 教授（前国際パークリ協会会長）から要請されていた、研究代表者の視点からするパークリ理解の全体像に近いものが、用意できることになる。

(3) 2011年度は、まず、「物」（経験的对象）の「外在性」の認知に関するパークリの見解を検討する。ここでとりわけ重要になるのは、『新たな視覚理論のための試論』における彼の議論である。この議論は、知覚に関するロックの見解をさらに発展させたものとして捉えられるが、その議論に

おいてパークリが行う外在的認知の説明が、外界を心の中にある観念からなるものとする彼の見解とどのようにかみ合っているかを、いわゆる「モリニュー問題」の諸議論をも念頭に置きながら、明らかにする。この試みは、観念を「心の中」なるものとするロックとパークリにおいて、その「心の中」という言葉が真に何を意味しているかを明確にしようとするものであり、これによって、故 John W. Yolton 教授との間で続けられてきた「心の中」の意味をめぐる議論に、一定の結論が与えられる。また、そうした作業と並行して、年度後半では特に、近年強調されているヒュームの中のカント的な面を再考し、ヒュームの観念説が持つ〈自然主義的論理の解体〉と〈カント的表象説の先取り〉の二面の関係を再確認することにより、次年度におけるカント研究への準備を進める。

(4) 2012年度は、以上の検討結果を念頭に置きつつ、カントの観念説（表象説）の読み直しを行う。その基本は、すでに 'Locke's "Things Themselves" and Kant's "Things in Themselves"' (2008) に示したが、ここではさらに、独断的観念論や懐疑論的観念論に対するカントの批判の真意を考察するとともに、「心の中」の意味を再度明らかにするよう試みる。これによって、ロックの遺産の継承とその論理の変質過程の実際が、より明確になる。この最終年度では、そうした作業を進めるとともに、本研究の結果が基礎づけ主義、自然主義、表象主義をめぐる今日の論争にどのような光を投じるかを考察する。これによって、本研究による近代観念説の再検討が新たな人間観に新たな支えを与えることとなる。

#### 4. 研究成果

本研究は、研究代表者の先行するロック、パークリ、カント理解の基本、すなわち、西洋観念説はもともと自然主義的な論理を核とするものであり、それがパークリとカントによってそれぞれの仕方で歪曲され変質していったという理解を確認するとともに、観念説を形成する個々の問題、とりわけ「心の中」の論理や、記号的世界理解の論理などの考察において、一定の成果を得ることができた。下記の雑誌論文①と②は、この件に関する本研究の核心部分のうち、特にパークリにおける観念説の変質を取り上げ、研究代表者のそれまでの研究をさらに進展させたものである。また、一連の研究成果は論文集（図書①）としてドイツで公刊され、現在それをめぐって海外の研究者との意見交換が続けられている。

なお、本研究は新たな科学研究費補助金を得て、最終的な詰めの段階へと進みつつある。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① Yasuhiko Tomida, 'Ideas without Causality: One More Locke in Berkeley', *Locke Studies* 11 (2011), 139–145. 査読あり。
- ② Yasuhiko Tomida, 'The Lockian Materialist Basis of Berkeley's Immaterialism', *Locke Studies* 10 (2010), 179–197. 査読あり。
- ③ Yasuhiko Tomida, 'Davidson-Rorty Antirepresentationalism and the Logic of the Modern Theory of Ideas', in Randall E. Auxier and Lewis Edwin Hahn (eds.), *The Philosophy of Richard Rorty* (Chicago and La Salle: Open Court, 2010), 293–309. 執筆依頼論文。査読なし。
- ④ Yasuhiko Tomida, 'Number and Infinity', in S.-J. Savonius-Wroth, Paul Schuurman, and Jonathan Walmsley (eds.), in *The Continuum Companion to Locke* (London and New York: Continuum, 2010), 191–193. 査読あり。
- ⑤ 富田恭彦「認識論史の終焉」、飯田隆他編『岩波講座哲学 14 哲学史の哲学』、岩波書店、2009 年、171–195 頁。執筆依頼論文。査読なし。

[図書] (計 4 件)

- ① Yasuhiko Tomida, *Locke, Berkeley, Kant: From a Naturalistic Point of View* (Hildesheim, Zürich, and New York: Georg Olms, 2012), xv+220.
- ② 富田恭彦『科学哲学者柏木達彦の哲学革命講義』、角川ソフィア文庫、2010 年、283 頁 (『科学哲学者柏木達彦の冬学期』改訂増補版)。
- ③ 富田恭彦『科学哲学者柏木達彦のプラトン講義』、角川ソフィア文庫、2009 年、283 頁 (『科学哲学者柏木達彦の秋物語』改訂増補版)。
- ④ 富田恭彦『科学哲学者柏木達彦の多忙な夏—科学がわかる哲学入門』、角川ソフィア文庫、2009 年、285 頁 (『科学哲学者柏木達彦の多忙な夏』改訂増補版)。

[その他]

ホームページ等

<https://sites.google.com/site/diogenespil/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

富田 恭彦 (TOMIDA YASUHIKO)

京都大学・大学院人間・環境学研究科・教授

研究者番号：30155569